

『トゥイ・キョウの物語』の第一和訳者である小松清（1900-1962）の訳本『金雲翹』が、頼んでいた古書店からようやく届きました。この訳本は昭和十七年に仏語版から重訳されたものですが、私の手元に届いたのは昭和二十三年の新刊でした。巻末の「訳者の言葉」では、当時の小松清の思いや認識が 25 頁にわたり綿々と述べられています。著作権は既に切れているはずなので、ここに「訳者の言葉」を転載します。タイプミス等をご容赦下さい。なお、小松清の人となりは『小松清－ヒューマニストの肖像』（林俊、クロード・ピショワ共著、1999 年、白亜書房）に詳述されています。

長らく探し続けていた本
日焼けがひどく古文書のような本
宝石のような言葉が詰まった本
六十年の隔たりが消えた
太平洋戦争勃発の日の翌日は
独房に囚われの身となり
敗戦後は丸腰で
仏越和平のために働いた
勇気ある文化人を誇りに思う

2005 年 9 月 10 日

佐藤 清二



書 名：金雲翹（キム・ヴァン・キョウ、
KIM VAN KIEOU）
著 者：阮攸（NGUYEN - DU）
訳 者：小松清
（仏文学者。『アンドレ・マルロー全集』
他訳著書多数）
発行日：昭和二十三年四月二十五日（新刊）
発行社：偕光社

訳者の言葉

ジイドの「ソヴェト旅行記」(昭和十二年)を訳していらい、私は翻訳という仕事から、すっかり遠去かっていた。それから、はや七年の年月が経つ。昭和十二年の夏から十五年の夏までヨーロッパにいたあいだも、完全に翻訳の筆をとらなかった。十五年の秋、帰国、その後もいろんな機会に翻訳の仕事をも望まれたが、例外なく拒んできた。

今日のような時代にあって、物を想い物をかく人間として、誰か己れの心をこめた遺業なり遺書をのこそうという希いを抱かないものがあるだろうか。こうした念願を心に秘め、外部と内部の嵐の声をききながら、私は黙々と自分の仕事をしていたのである。

その私が、こんど、約半歳の月日のあいだ、安南の古典文学として有名な「金雲翹」の翻訳に没頭した。自分への誓いを破り、自分の仕事を中断してまで、何故、私はこの訳業の遂行に努めたか。それは、無論、金雲翹が文学作品として優れた価値や感性をもっていること、独自の香気や味わいをもっていること、そうした文学的な魅力から発心したのは勿論であるが、それだけの理由で訳業にとりかかったわけではない。私は、この作品をとおして、安南民族の魂の秘密を窺うことができる、と思ったからである。これは優れた文学であるとともに、また安南人の魂を克明にうつしだした鏡である、これは文学作品というよりも、詩人による祈祷の書と呼ばれるべきものである、と思ったからである。これほど、民族の運命と繋がりをもった文学は、古今東西を通じて稀であろう。南の国を語る一方的な声のみきかれる今日、未だに南方人の魂の営みを伝える書が現れないのは、どうしたことだろう。そうした書の代表的な一つとして金雲翹こそ立ち現れるべきときである。誰もやる人がなければ私がやろう、とこんなに考えたからである。

私の心のうちに呼吸している安南の人たちは、ほとんど宿命的に金雲翹の世界に棲んでいる。この世界を一度破って出てこなければならぬ日がきているのに、と思わせるときがあるほど、翹の世界に深い愛着をかんじている。宿命というか伝統というか、そうしたものの絆は、目にみえない力をもって根づよく、この民族を支配している。

もちろん、この宿命は永遠なものではなかろう。そうでないことを私は願う。必ずや、それは己れの力によって、己れを乗り越ゆる日に辿りつくだろう。逆説的な言い方をすれば、安南人が彼らの伝統のうちに享けついできた精神の力によって〈精神の牢獄〉をやぶる日は遠くはないだろう。しかしながら、それは何といたっても将来のことであって、今日の安南人の動きは、その慨世憂国の志士の動きにおいてすら、やはり金雲翹の影響がみられるという現実を忘却してはならないのである。

私は、こうした意味からして、今日のような時代にあって、われわれと彼らのあいだに精神的な対話の一つの機会をつくるため、彼らの魂の鏡とも云うべき民族文学を訳することに、大きな意義をみとめたのである。そしてまた、この訳業が、われわれが安南人及びその歴史や伝統や文化にたいして、心に抱いている愛情と敬意、理解と批判を具体的に証左することの二者の心を結びつける一つの絆となれば幸いである、といったところに数年来ぶりに私が再び訳者として立った真意があったのである。

昭和十六年の春から夏にかけて私は、はじめて安南の地に旅したのであるが、その旅中、

まったく偶然の機会にめぐまれ、ハノイで、旧友の安南詩人阮江（ニューアン・ジャン）に再会することができた。十星霜まえ、パリで別れたときは一介の留学生であった阮江は、祖国にかえって、いつのまにか、押しもおされぬ安南の代表的な詩人となり評論家となり出版者となっていた。私ら二人は、思わぬ奇遇に相擁して再会のよろこびをわかったが、この旧友阮江の勧めで、はじめて手にしたのが金雲翹である。手にした瞬間から、最後の頁をよみ了るまで、私は文字どおり四百頁にもならんとする、この繊細優美な大叙情詩のつよい魅力の囚となってしまった。私がよんだ数多くの安南文学の作品のうちで、新旧の作品をあわせて、金雲翹に及ぶものは一つもなかった。文学的価値の高さから云っても巍然として他を圧していた。征婦吟（チン・プー・ナム）のようなすぐれた古典もあったが、金雲翹の汲めども尽きぬ深淵のような豊かさにくらべると、小さくまとまった名品といった感じの方がつよかった。

奇縁というものは孤独なものでない。私に金雲翹の存在を教えてくれたのが阮江だったが、この作品を現代の安南語—いわゆる国語（コク・グウ）—に訳し、かつまた稀れにみると云われるほど見事な仏語に訳している名訳者が彼の父君、即ち近代安南文学の大家として高名な阮文永（ニューアン・ヴァン・ビン）である。

阮父子による願ってもない一流の手引きによって金雲翹を知り、さらに金雲翹によって私は〈安南の秘密〉を窺い知ることができたのは、まことに思いがけない幸運であった。

かつて、モオリス・パレスは「グレコ或はトレドの秘密」を書いた。彼は書聖グレコの作品をとおして、スペイン人の魂の営みを把もうとした。私もまた、心からなる真実と愛情をもって金雲翹をひもとくものは、ついに安南人の魂の営みに接することができるだろう、と知っている。

今日、世界至るところで、国民文学創造を要望する声があがっているが、この安南叙情詩ほど、国民文学の名に応わしいものは稀であろう。〈金雲翹が栄えるあいだは、安南語は栄える。安南語が栄えるあいだは、安南国は栄える。〉これは或る安南の友人の言葉であるが、金雲翹という文学作品が、如何ばかり民族の運命との繋がりをもっているか、そのことはこの言葉によってうかがい知ることができるだろう。上は王侯、貴族、富人。下は百姓、歌妓、乞食のたぐいにいたるまで、階級、年齢性の差別をとわず、一千幾百万をかぞえる民族の一人一人によって日夜愛誦されているのが金雲翹である。このような普遍性をもった文学作品が古今東西どれだけあるだろうか。いつか、私はこんなことを云ったことがある。金雲翹は、安南人にとっては日々の糧であるが、また彼らの生活をそのままうつしだす鏡である、と。それほど、この文学の本質的なものは、安南民族上下を通じて、彼ら個人の心のうちにも、民族の社会的或は倫理的な生活のうちにも、風俗習慣のうちにも、はっきりみてとられるのである。今、安南人の生活から金雲翹をとりのけるとしたら、彼らは忽ち生活の糧を失うだろう。翹の歌を絶えず胸にして生きている彼らは、翹の心を離れると、恋することも、夢見することも、信ずることも、死ぬこともできなくなる、と云っても云いすぎではなかろう。と或る安南の詩人が私に云ったことがある。もちろん、こうした心の営みのうちに、さきほど私が〈精神の牢獄〉という言葉によって表現しておいたように、安南人の純粹さと狭さが共存していると云えるだろう。伝統精神が薄らいでゆく現代にあって、伝統の精神を貴ぶ民族性は美しいけれど、しかし伝統の塔からでることを

躊らう保守・退嬰は悲しむべきである。

十九世紀の初期、阮朝に仕えた一高官阮攸（ニュアン・ヅウ）により安南語で綴られた膨大な叙情詩、金雲翹。それは生涯を懊悩と苦痛、誠実と幻滅、愛と忍従と諦めのうちに送った世にも哀れな一女性の一生を切々と唄ったものである。人間の運命、ことにひとりの女の運命など、前世の因縁やこの憂き世の掟のまえには、まったく無力にひとしいものである、と翹は歌っている。無限の苦しみと不安の連環である人生に漂泊する捨小舟が彼女の姿である。そして、それは恐らく作者の心境にうつった作者の姿でもあろう。阮攸は、阮王朝を代表して二度も大使として北京にきたことのある大官であるが、彼の一生は悔恨、失意、寂寞に綿々とつづられた哀史であった。畢竟するに、この詩人大使は、この作品のうちで、翹なる一女性に姿をかりて、彼の深く傷つける魂をうたったのであろう。望みも救いもない人生をうたったのであろう。しかも、これは翹の唄をとおして描かれた一詩人の蕭条たる心をうたった悲劇的な叙情詩として止まらず、やがて今日の条件におかれる運命にあった安南民族のそれとなろうとは、いかに阮攸とても知るよしもなかったのであろう。

この悲しい空泡のような人生にあって、翹を美しく正しく生かせることのできたのは、祖国への忠誠、先祖を崇め敬う心、父母への孝心、愛人にたいする貞操である、と翹は繰り返しかえし教えている。しかも阮攸の一生涯に救いがなかったように、翹にも望みと救いは訪れてこなかった。ただ運命にたいする凝視からくる静謐がのこされたのみである。私は異常な興味と感動をもって、この長詩の一頁一頁をよんだものである。まさしく波瀾万丈といった物語の発展につれておこる無限の興味と、香りたかい劇的な雰囲気をかんじたものである。と同時に私は、それらの私的な感動や昂奮の世界意外に、また別に、知的な探求心をみたくすることができた。それは、この作品のうち、もっとも具体的なかたちで、安南民族の感情並びに思想生活や社会生活の全貌とも云うべきものが、みごとに描きだされているからである。金雲翹の仏訳者として且つ研究者として知られている仏人ルネ・クレイサクも、彼の訳述した金雲翹の序文の中で、次のように云っている。〈読者は、この書のうち、安南における家族や社会の組織、信仰、宗教、儀式、公私の日常生活、冠婚葬祭、祖先崇拜の伝習、官吏選抜の審査制度、法律、軍事、その他諸々の風習等々、実に広般にわたる知識を得ることができるだろう〉と。

金雲翹は六音節、八音節の交互して綴られた三千二百六十節からなる膨大な叙情詩である。（六音節と八音節の交互形は安南詩の特殊な伝統的な形である。）これは叙情詩であるとともに、詩の形をとった小説であるとも云えよう。

安南の貴人も詩人も民衆も歌妓も、金雲翹を唄っているときは、あたかも一種の愉悦にはいきっている。物語そのものからくる感動もさることながら、それと同じように、この詩に具わっている音律の美しさというものが彼らの感覚を動かし、心を酔わせる。それは、ちょうど朗々誦して陶然己れを忘れるといった境地にちがいない。それは、また恐らくイタリア人がダンテを誦し、イギリス人がシェクスピアを、フランス人がラシーヌを、ドイツ人がゲーテをよむときに湧きあがってくるあの最も民族的な、骨肉心身の悦びとでも云える全人的な欣びであろうと思われる。このように想像することはできても、初歩的の安南語を往来している私には、到底彼らの愉悦や醍醐味はあじわう術もないが、しかし、

耳にひびいてくる彼らの詩の音律はたしかにこころよいものである。安南人にとっては、何といても、彼らの言葉の美と音楽にたいする信仰は絶対的のものであろう。そのことは、一つの民族的なミトスであって、われわれの云々をゆるさないものであろうし、またそれが、たしかにその民族の芸術表現の本質、つまり精神の塩をなしているとも考えられるのである。

ところで、この精神の塩を殆ど味わうことのできない私が、この精神の塩をもっとも裕に含んでいる作品を翻訳するにあたって、前もって大きな困難を覚悟してかかったのは当然すぎるほど当然のことである。安南語のできぬ私としては、阮文永やクレイサックのような人たちが、数ヶ年の努力をもってした鏤骨砕身の仏訳に信頼するよりしかたがなかった。

すでに、仏訳によって原文の音楽的な美しさ、つまり精神の塩を失っているものが、邦訳されるに及んで、更にそれを失っているであろうことは、訳者である私自身が誰人よりも、よく知っている。また、言葉の音楽的な美しさを失うとともに、物語の叙情的な面が、自然つよめられてくることも致し方がない。

私は、以上の点について充分考えた末、訳文のスタイルも、なまじっか、六、八音節の韻文正調を踏襲して、かたわら音楽的なものを傷つけ、かたわら物語的なもの乃至小説的なものの理解を難渋なものとするよりも、いっそ、はじめから詩情を重んじた散文のかたちで翻訳した方が、かえって原作の姿にも香りにも近いものができるのではないかと思ひ、ついに心を決して、この方法をとることにしたのである。さて、出来あがったものをみると、我ながらいささか自信をもって差支えないと思われる出来ばえなので、まず胸を撫でおろしたしだいである。やはり、自分の選んだ方法が適宜であったと思ひなおした。

それから、その訳文も、最初訳業を企てたときは、伝えにくい詩的な面よりも、伝え易い物語的なものに重点をおき、したがって多少抄訳のかたちをとることを余儀なくされるだろうと考え、そうした方向にすすんでいたのであるが、仕事をはじめてみると、詩的なものと物語的なものが不可分の関係にあることを一層つよく感じ、完訳に近いものをめざしたようなことになった。しかし、今になって考えると、そのため仕事は尚更困難の度をましたが、結実の豊かさを遙かに加えることができた。そう思っただけで欣んでいる。

クレイサックも云っているように、金雲翹の価値は、単に文学的価値だけではなく、支那文明の著しき影響をうけて発展してきた安南の文化や社会、人情の諸相をうかがう上に貴重な参考資料を供するものである。

とりわけ、最も重要な認識を与えるものとして、支那的安南社会が〈父系家族制〉の上に厳然と立っていることを随所に示している点である。この父系家族制は、法律的にも、社会的にも、また倫理的にも然りである。先祖にたいする絶対的な尊崇、父母への孝心、家名をつぐ子孫への重大な関心、一つとしてその現れでないものはない。これは、唯に家族という単位に於いてのみならず、単位をひろげて社会的、国家的なものにおいても、異なる名の下に於いて絶対である。曰く共同村落制、曰く君主と臣民、さらに君主と天帝の関係において然りである。

金雲翹にあつて、女主人公の翹が金重（キム・チョン）との恋を犠牲にして、一身を売るに至ったのは、父を救うためであるとともに、また家系を保存するためでもあつた。我

が身の代わりに、妹の雲（ヴァン）を金重に嫁がせるところなど、この間の消息を雄弁にものがたっている。

第二に、われわれに関心をつよく惹くものとして、安南人における世界観や人生観の問題がある。これは、この叙情詩中、至るところに窺いとることができるが、一言にして云えば、圧倒的に仏教の影響、そして若干道教的な影響がみられる。と同時に、安南民族がその原始時代から享けついでいる精霊崇拜主義（アニミズム）の追憶も所々残存しているということができよう。

クレイサックは、このような安南の諺をあげている。

〈死ぬことは旅路の果て。我が家（魂の）にかえることである。嬉しかろうとも、悲しいことのあるはずはない〉と。

翹は屢々、人の世をさして浮草の世とか、彼女の人生をさして水泡の生涯と呼んでいるが、彼女にとって、この世界に生きることは、まさしく一つの負い目であり、その償いのための生活であるだろう。しかし、その負い目といい、償いといい、みな前世の因縁によるものだ、という因果応報（Karma）の宿命感、死者の霊にたいする畏敬、崇拜の念とひとしく、全編至るところににじみでている。

現世にたいする前世の支配。同様に生者にたいする死者の支配。こうした絶対的な信仰にもとづく因果（カルマ）の絆。輪廻の法則。永劫の繋がりとしての家族。そして、死人の世界にたいする儀式と典礼。さきほども、一言したように家族（父系）制度が、血の永劫の繋がりとしての家族の信仰が極めてつよい、その故に、一家に男子の嗣子のないことは、最大の不幸であり且つ先祖にたいする最大の不幸となっている。金雲翹の中に、あれほど翹に愛着をもち、心中までしかねまじき愛人の束生（ツク・シン）が、まだ嫡子をもっていないという理由からして、翹を思いあきらめねばならぬところがあるが、これなどいたって暗示的な一節である。正統の子孫をのこさないで死んで逝ったものの魂は、地獄にさまよい、未来永劫に救われぬ、と今日にあっても、安南民族の多くは固く信じているようである。こうした点で、仏教的な宿命感、儒教的な社会観と、ぴったりと結びついているのである。

安南民族の宗教は、儒教、仏教、道教、そして原始的信仰の混成からなりたっている。しかも、その混成の程度は各個人の属する社会層により、また個人の性格によって異なっている、とクレイサックは、金雲翹序論のうちで云っているが、またこうしたことも云っている。

〈金雲翹はに、儒教、仏教、道教という三つの宗教が、はっきりした具体的な現れ方をしている。皇帝、父母にたいする義務、夫婦間に於ける義務、結婚、葬祭、祖先崇拜、儀礼の尊重といったことは、みな孔子の教えから出ている。因果応報の観念や、それに結びついたところは、仏教からきている。そして、鬼神を呼び降ろすところや、亡霊のあらわれてくるところ（例えば翹が、亡き歌姫淡仙人（ダム・チェン）と邂逅あうところや、また束生が翹の生死を知ろうとして、妖術者に占ってもらうところ）などは、まさしく道教からきたものと考えられる。〉

クレイサックの分析は、いささか概念的な疑いがないではないが、しかし、こうした観察を緻密につきすすめてゆくと、金雲翹は、確かに支那的安南社会の精神的乃至文化的支

柱の交互構造をきわめる上に、貴重な資材と示唆に富んでいるにちがいない。例えば、この書の中に溢るるばかりみなぎっている、自然の相にたいする詩人の詠嘆や、春夏秋冬とうつりかわる季節の変化にたいする切ない感傷やつよい愛情は、老荘的世界への思慕から生まれたものであろうが、それはまた、安南民族本来の感受性のうちに伝わっている原始的なもの、即ち精霊崇拜（アニミズム）の精神といったものの根づよい伝統とも考えられるのである。

文学作品としての金雲翹は、しばしば、多分に官能的な性格の表現をみせている。この点、やはり典型的な南国文学の一つであろう。恋愛心理の描写など、極めて心理の相や発展に忠実であって、支那文学に往々みられるようなあの概念の鋳型が感じられない。それだけではない。よく気をつけて読んでみると、翹における恋愛心理の複雑性がみてとられる筈である。あれほど金重にたいして身も心も燃えるような初恋を感じていながら、翹は、楚卿（スウ・カン）の誘惑に心を動かされ、東生と恋し、徐海（チュ・ハイ）を愛している。そして、さいごに金重との永遠にプラトニックな、空しい亡骸の恋に立ち戻ってくるのである。作者の立場は、翹と金重との清純な愛と、その愛の誓いにたいする貞節の観念に重点が置かれていることは否むべくもないが、それと併行して、作者が愛欲、官能の世界に感じている誘惑の大きなことは、この作品を解する上に、一つの重要な鍵であると思う。

一方に、このような官能的な、多情多感の性格があるのに反し、他方、そうした性格をはっきり否定し斥けている思想がある。もちろん、仏教思想と呼ぶべきものであるが、もっと適切な表現をもってすれば、仏教的影響をつよく享けた阮攸の人生観であろう、ということができよう。

才即ち災。と阮攸は云うが、それは、ひとしく美即ち災といいかえることができよう。才と美は得てして災（不幸）をさし招くものであるが、それをより突きすすめてみると、災（不幸）なるものは、この現世に才や美の相をかりてあらわれてくる、といったような因果律的な考えが阮攸の心中にひそんでいるように私には考えられるのである。

官能の華の世界に棲みながら、あらゆる生活の辛苦を、その官能の華の世界になめる翹の運命は畢竟するに、富貴栄達の地位にありながら、一生鬱々悶々、その地位を咀い悲しんで暮らした作者の姿に他ならぬだろう。

このようにして、金雲翹を分析、解説してゆくとすると、限りないほど、取りあげるべき問題がある。仏訳者のクレイサックの解説をみても、それだけで悠に百数十枚に達している。私も、孰れ機会をみて「金雲翹或は安南文学序論」といったような題目で、私なりの研究を発表しようと思っている。しかし、その日は何時くるだろうか。今日は、あまりにも凄烈な嵐の時代である。

阮攸が、金雲翹をかくとき、そのモデルにしたのは支那文学「清心才人」であるといわれている。恐らく、阮攸が北京に安南国の大使としていたころ手にし、それから物語の材料や暗示を得て、後年不滅の名作金雲翹をものしたのであろう。その書の作者や、かかれた年代については、阮文永やクレイサックの序説によっても、瞭かにされていないが、物語の冒頭に、明朝の嘉靖帝の御代（西暦 1521—1565）とあるから、もちろん、そのころ或はその後にかかれたものであろうと考えられる。したがって、物語も人物もみな支那人

であるし、また文中随所に支那古典からの引用があり、かつ神話・伝説も殆ど支那のものであるが、しかし文学としての価値の上では、金雲翹はモデルとなった作品を遙かに凌ぐものとなっており、また表現、感覚、心理或は描かれた風俗、習慣の上でも、立派に安南化され、名実ともに安南の国民文学をなしている、と阮文永、クレイサック、コルデイエ等は異口同音に云っている。

これら安南文学の専門家たちによる保証の言葉を必要とするまでもなく、この物語の至るところにみられる心理的発展の真実性や独特な感受性をみれば、この文学が〈支那文学の模倣〉と呼ばれるべきものでなく、瞭かに、安南人の筆と心によって安南人のためにかかれ、安南民族のものとなった文学であることが、容易に理解されると思う。

さらに、われわれが忘れてならぬ、もう一つの重要なことは、この膨大な作品が漢文によってかかれず、はじめて安南語（より詳しく云えば安南化された漢語、所謂字喃（チュ・ノム））によってかかれたことである。阮攸自身も、この作品を世に出す以前は、漢語による著述が少なくないようであるが、この代表作を安南語によって表現したところに、安南国民文学の創始者と呼ばれるだけの大きな名誉を担っているのである。

金雲翹の解説については、まだ言及されねばならぬ問題が多分に残っている。このことは、私自身が誰よりも、よく知っている。しかし、そのためには私自身が、もっと安南の歴史や文化や社会を勉強しなくては、自信をもって物を云うことはできないと思っている。また、そのためには、阮文永、コルデイエ、クレイサックをはじめ、その他安南人や仏人の安南文学専門家による金雲翹研究を参考とし暗示として学んでゆきたいと思っている。

私が金雲翹の邦訳にとりかかったのは、まったく意外な機縁からであった。なるほど、安南の旅から帰ってきてから、私は機会ある度毎に、金雲翹について語り、またこの名作が翻訳されることを薦めはしたが、まさか私自身がこの書を翻訳するといった重大な責任を負おうとは思わなかった。その点、私の心境は拙著「仏印への旅」のなかに、はっきりしるされている。

〈私は、この名作の邦訳が一日も早く現れることを希望する一人であるが、またこの書の訳業が、ダンテやシェクスピアやラシーヌの翻訳が至難の業であるのと同じく、いろんな困難を覚悟してかからねばならぬこと、また異常な才能と努力を要するものであることを知っている。

翻訳の技術の上からいっても、支那文学の知識を充分にもち、かつフランス語—もちろんフランス語から重訳する場合を云っているのだが—に精通した人でなければならぬ。かつまた立派な日本語で訳出できるだけの才能をもっていなければならぬ。そして、何よりも大事なことは、この書が叙情詩のかたちをもって表現されている故に、訳者が詩にたいする感性と理解力を具えた人でなければならぬ。

これだけ数多くの資格を兼ね具えた人を見出すことは、恐らく日本広しと雖も、殆ど不可能のことと思われる。そうすると、唯一の実現の方法は、これらの資格を部分的にそなえた人たちが、二人乃至三人、或は四人、五人と互いに協力して、共訳のかたちで邦訳をつくることになるだろう。こうした形式でも結構だから、ほんとうに良心的な訳業で、且つ芸術的な格調や香りを失わない立派な邦訳のできることを私は希ってやまない。また、そうした訳業なら、微力ではあるが、私も出来るだけの援助を惜しまないつもりでいる。

そのためにすぐれた安南の文学者を協力者として招くことくらいの斡旋の労をとってほしいと思っている。)

このような心境にあった私が、ついに、この至難の業にあたらねばならぬようなことにたち至った。数々の出版者たちの懇望を断ってきたのであるが、金雲翹の演劇化や映画化の問題とからんできて、ついに東宝書店の要望をいれることになったのである。しかも、いまあげた、訳者としての必要な資格に欠けるところの多い私が、この仕事の大部分を単独で果たさねばならぬことになった。たしかに私にとっては大きな重荷であった。しかし、一旦やりはじめた以上、如何なる困難にも打克とう、といった意志と精進をもって私は終始一貫した。

阮文永やクレイサックのような人たちが、数ヶ年の努力を費やしてやった仕事を、私は僅か半歳の時日でなしとげなければならなかった。云うまでもなく、訳文中、文法的の正確さや、芸術的な洗練、香りといった点で、処々未熟のところもあるにちがいなかろうが、それは広く識者の御教示を待つことにより、また私自身の研鑽によって、訳文を修正、琢磨してゆきたいと念じている。したがって、この度上梓された訳文は、決定的なものでなく、むしろ〈仕上げを待つ秀作〉のようなものと考えている次第である。

最後に、この書が陽の目をみるについて、各方面の多くの人々から、いろいろ貴重な教示と激励と援助に恵まれたことを、深く感謝したい。

先ず私は、一つの大きな文化財であるこの名作の存在を教えられた敬愛する安南詩人阮江、門外不出の貴書と云われている父君阮文永による安仏対訳を私にかしあててくれた阮江に、遙か東京の空から心からなる感謝の言葉をおくる。

ついで、私の訳業に直接間接、協力と援助をたまわった友人姫田嘉男、大岩誠、浅見篤、山川壽一の諸氏にも厚く御礼を申しあげる。

また、安南語（嘗ての安南的漢語である字喃（チュ・ノム）や今日の羅馬字による国語（コク・グウ））について、或は支那の故事、伝説について、或は漢越成語について、あらゆる教宗をさづけて下さった滞日の安南学者阮文泰氏にも、一生忘れることのできない感謝の意を表す。氏の協力なくして、本書は到底世にでることは不可能であったろうからである。

井萩の寓居にて

小 松 清

続 訳者の言葉 （昭和二十三年版の後記）

旧版金雲翹を世にだしてから、はや足かけ七年の星霜がすぎ去った。戦争は悲劇的な敗北におわり、私は終戦ののち、一年あまりして金雲翹を生んだ安南の地から幾年ぶりかに帰ってきた。

戦争中、すでに胎動していたこの国の独立への気運は、終戦と同時に、敗北日本の呻吟と苦悩の姿を踏みこえ、ついに越南共和国を実現した。私たちは、民族の解放と自由自治を希って唱う彼らの新国歌の音律を耳底にのこしながら、引揚船の船上から、灼熱するデ

ルタの水蒸気のうちにしだいにぼかされてゆく海防（ハイフォン）の港を名残惜しく見送ったのは、一昨年四月中旬のことであった。それから一ヶ月有半ののち私たちは久方ぶりに故国の土を踏むことができたのであるが、私たちの眼前に展開する祖国の姿はまさに国破れて山河も空しといったものであった。あのころ、私は胸中どこかで、ふと翠翹の歌を挽歌（エレジイ）のようにきく瞬間があった。また、ときには、嘗ての昇龍（タン・ロン）、今の河内（ハノイ）をうたった阮攸の悲詩の一節を思いうかべた。

千年巨室成官道
一片孤城没故宫

しかるに、この翠翹の国は独立を宣して越南となり、一片の孤城でしかなかった昇龍の都には、そのころ真紅の地に黄色の星をつけた新しい国旗が洪水のようにあふれていた。まことに、民族の興亡ほど測りがたく数奇を極めるものはない。

旧版の後記のなかで、私は金雲翹と安南人の精神的な繋がりについて、次のように云っている。

「私の心のうちに呼吸している安南の人たちは、ほとんど、宿命的に金雲翹の世界に棲んでいる。この世界を一度破って出てこなければならぬ日がきているのに、と思わせるときがあるほど、翹の世界に深い愛着をかんじている。宿命というか伝統というか、そうしたものの絆は、目にみえない力をもって根づよく、この民族を支配している。

もちろん、この宿命は永遠なものではなかろう。そうでないことを私は願う。必ずや、それは己れの力によって、己れを乗り越ゆる日に辿りつくだろう。逆説的な云い方をすれば、安南人が彼らの伝統のうちに享けついできた精神の力によって、彼らを閉じこめている〈精神の牢獄〉をやぶる日は遠くはないだろう」

この宿命というか伝統というか、安南の民族にまつわりついていた絆は、今や彼ら自身の力によって断ちきられた。そして、あの妄執のようにみえた〈精神の牢獄〉ももついに打ちこわされた。これは歴史的現実が証をたてているから、私がここで言葉をつらねるまでもない。唯々、今昔のこと、感慨無量というよりほかはない。

この度、偕光社主人の懇望によって、金雲翹の新版をだすことにした。私の訳文は、全部旧版そのまま、一行一句も修正の筆を加えていない。新版の後記として、何かという出版者の希望であるがこの書について別にこれといって、云うことはない。ただ、右に書きしるした感慨を後記として、おきたいだけで満足である。金雲翹序章の枕言葉に、こうした一節がある。

「厳しい流転の掟にしたがって、さまざまな事ともが瞬くまに生まれ、瞬くまに滅びてゆく。寸刻のうちに意外な変化が起ることがある。あしたの桑田夕べの蒼海となる。げに、有為転変のこの世である。」

今や、越南は希望とともにたたかい、そのたたかいのうちに生きている。

しかるに、われわれ日本人は、敗惨の悲しき黄昏につつまれ、絶望とのたたかい、転落する自己とのたたかいのうちに喘ぎながら生きている。何時の日か、名誉ある平和の日をむかえることができるだろうか。

この訳著が世にでたのは、昭和十七年の秋である。太平洋戦争勃発の日の前日、官憲の手によって独房に囚われの身となった私は、その後四ヶ月目に釈放されてから、ほとんど蟄居生活をしながら、この書の邦訳に没頭したのであるが、あのころの私は、寝ても醒めても念じつめたのは、日本脱出の事であった。そして逃避の地であり且つ希望の地であったのは、いうまでもなく翠翹の国であった。それほど、この国と私とはすでにつよい縁の絆でむすびつけられていたのである。

ここらで、筆を擱かねばならぬが、後記をおわるにのぞんで、私は彼の地で親しく交遊したすべての友に、心からなる友情と最善の追想をおくるものである。これらの人々のうちには、越南人あり、フランス人あり、日本人がいる。また、今は幽明境を異にした人々も少なくない。しかし翠翹の国に心からなる愛情をもった人たちでさえあれば、それが如何なる国籍の人士であれ、私の記憶から永遠に消え去ることはないであろう。

親しい友のなかでも、とりわけ私は詩人阮江（ニュエン・ジャン）を想う。金雲翹の存在を私に教えてくれた阮江を想う念や切なりである。私が河内（ハノイ）を去るとき、彼は越南政府の外交顧問をしていたが、今はどうしていることであろう。私はまた、阮江について最も親しい友であった潘玉沔（ファン・ニョク・タック）を想う。さいきんの外電の伝えるところによれば、彼は今、越南政府の副総理として専ら国際的に活躍しているようであるが、好漢幸いに健在なれ。阮江といい、潘玉沔といい、じつに立派な文化人であり、稀にみる信念を身につけた自由主義者である。

フランス人の友のうちで、いっとう深く感銘に刻みこまれているのは、河内のフランス代表部にいたフランソワ・ミソフであろう。現在パリに帰っているらしいが、彼と私の非常に深い関係は、一九四六年の一月、微力ながら私が仏越交渉の踏み台といった、陰での〈平和への努力〉のために犬馬の勞をとりはじめてからはじまっている。このミソフにしろ、彼の上司であったフランス代表J・サントニィ氏にしろ、また仏越和平交渉に応じた越南側の要人たちにしろ、そして日本人としては丸腰で一人ぼっちりの私や近江谷駒氏などにしろ、みな二、三ヶ月のあいだは生命をかけて仏越二国の平和と共存共栄のために働いたのである。ソロヴィエフや田原さんや北村女史のことも思い出される。また終戦の一年まえ、河内の素如（トウ・ニュ）劇団によって金雲翹が上演されたとき、この上演を積極的に後援された田代重徳、横山正幸氏らのことも思い出される。回顧すればするほど、懐かしくもあり、友情と感激にみちた、男として生き甲斐のあった時代である。

さて、筆をおくにあたって、私は仏越両国間の互譲と理解の上にたった親和と協力の結実する日が、一日も速かならんことを祈ってやまない。何故なら、この実現は明に仏越両国のみならず、東亜の平和と文化の向上に貢献するところ大なるものがあろうと私は衷心から信ずるからである。そして、いつの日か、われわれ日本人もこの平和と繁栄のための聖業に参加しうる日があろうと希っているからである。

昭和二十三年二月二十九日

同じく東京井荻の寓居にて

小 松 清